

# 人間学部社会科学の取り組み

加 村 隆 英 (人間学部社会科学)

社会科学がこれまでに取り組んできたユニークな教育実践の歴史については、吉田正教授によって昨年度の報告集で詳細に述べられている。2004年度においても、従来から一定の成果が認められているものが継続して実施された。以下に、その内容を簡単に紹介する。

## 実習プロジェクト

野外キャンプ実習「何もない山の中で、食うこと、寝ること、遊ぶこと、そして学ぶこと」

実施期間：2004年7月29日～8月1日

場所：兵庫县城崎郡日高町 分尾キャンプ場

参加者：教員4名(矢谷慈國教授、他3名)、学生20名、卒業生他4名。

例年と同様、電気・ガス・水道のない山の中で、3泊4日の共同生活を営んだ。食料だけは町から運び上げるものの、自分たちでテントを張り、薪を割り、川の水を利用して生活する。じつは、学生たちのすべてが、このキャンプを楽しみにして参加するわけではない。便利な都会の生活しか知らない学生たちの中には、このような山の中で過ごすことに対して、けっして気乗りはせず、大きな不安感を持つ者が少なくないのである。しかし、事後の学生たちのレポートを読むと、そのような学生でも、このキャンプを終えた後に残るのは、たんに辛かったという感想だけではないことが分かる。彼らは、この非日常的な体験を通じて、今までの自分に欠落していた何かがあったことに思い至り、人間が生きることの根本にあるものについて考えを巡らすようになるのである。

## 講演会

「阪神・淡路大震災被災地10年の問題と課題」

講師：河村宗治郎氏(兵庫県被災者連絡会会長)

日時：2004年10月27日 午後1時20分～3時30分

場所：本学2号館2404教室

阪神・淡路大震災から満10年を経ようとしている時点で、被災地における復興の現状を検証し、今後解決すべき課題について共に考える機会を持つことを目的に開催した。講師の河村氏は、

[ ]各学部学科の「特色ある教育」報告

震災当初から兵庫区本町公園避難所のリーダーとして、被災地復興のために尽力し、現在もその活動を続けている方である。被災者間の連絡や意見の取りまとめ、行政との交渉などに、長年に亘って携わってこられた方ならではの実体験に基づく話には重みがあった。阪神・淡路大震災のみならず、さまざまな災害による被災地の復興にかかわる問題について、多角的に考えたいへんよい機会となった。

上記のほか、正規の授業である「社会学フィールドワーク」においては、茨木市内における実地調査やインタビューの実践などに基づく実習が行われた。また、「人間学フィールドワーク」では、毎年恒例になっている農作業実習が行われた。

なお、実習プロジェクトのひとつである「さかさま大学 KJ法<sup>®</sup>2005」は、原稿執筆時には未実施であるが、例年どおり、教員3名が担当し、12名程度の学生を募集して、2005年3月に実施する予定である。